

第1分科会 小学校

実態を踏まえた道徳教育の指導計画と評価

～道徳科の授業改善を中心とした推進～

真狩村立真狩小学校 教諭 奥村 崇人

1 はじめに

「特別の教科 道徳」は移行措置を経て、小学校では平成30年度より完全実施となった。学校の教育目標の達成を目指すに当たって、教育活動全体を通して行う道徳教育は非常に重要なものになると捉えている。その要となるのが「特別の教科 道徳」（以下、道徳科）である。

本校では、道徳教育推進教師として、全体計画の作成や指導体制の確立、教材の整備・充実・活用はもちろん、道徳科における授業改善に向けた情報提供や研修などを進めてきた。

本研究では、本校における児童と教員の実態及び、教育方針を生かした全体計画、指導計画の作成、校内における授業改善の取組等について紹介していく。

2 本校における実態

(1) 児童への実態調査

私が昨年度に担任した学級において、4月初から「道徳嫌だな」「道徳きらいだ」という声が聞こえてきた。そうした実態を把握するため、令和3年度4月 第3・4・6学年を対象とした「道徳アンケート」を行った。その結果、「道徳科の学習が好きだ」の設問において、肯定評価の割合は5割程度であった。児童の実態から道徳の学習への意欲は決して高くないことが分かった。

その中で「道徳が嫌いとする理由」としては次のような回答がみられた。

- ・「決まり切った（当たり前な）ことを発表させられるから」
- ・「お説教みたいな感じだから」
- ・「国語みたいだけど、正解がないから」という児童の素直な気持ちが述べられた。

(2) 教員への実態調査

昨年度の7月には、児童の実態を基に、教員を対象とするアンケート調査を行った。「授業を行う際に、難しいと感じるのはどのようなことか。」との項目に対し78.8%が「発問を考えること」と回答した。また、「授業づくりにおいて重要だと思うのはどのようなことか。」の項目に対しても「発問」という回答が83.3%であった。

この結果より、道徳科の授業づくりにおいて、「発問を考えること」は重要視されているが、だからこそそこに困難を感じており、教員は発問に関して課題を持っていることが分かった。

これらの実態調査より、児童の道徳に対する思いを変えるには、まず教員が道徳教育及び道徳科の授業の在り方の見識を深め、授業を変えることにより、児童の考えにも変化があると仮説を立て、実践を重ねた。

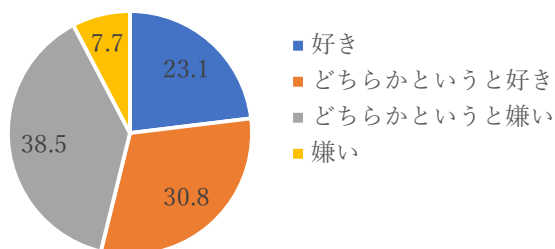
3 道徳教育推進教師を中心とした授業改善

(1) 道徳通信の発行

道徳通信は、本校の教職員を対象に、主に道徳科の授業に係る内容を発信している。本質に迫る発問を中心とした授業や、多面的・多角的な見方につなげる構造的な板書について、学校行事と関連する道徳的価値の紹介などを中心としている。研修会等で学んだことの還流の場としても活用し、本校での実践のみならず他の地区における実践にも触れられるようにした。

また、行事の事前指導等は道徳科の時間で行うのではなく、相互の関連を考え、発展させる

道徳の学習は好きですか
(令和3年度 4月 3・4・6年)



ことができるよう周知を図った。

Think and Discuss
 真狩小学校 道徳教育研修通信 令和3年12月2日発行 NO.13 文責：奥村

考えるに値する「発問」

「考え、議論する道徳」の授業を目指すために、発問の構成が一つの力千だと考えています。発問には、「場面発問」と「テーマ発問」の大きく2つの発問があります。このことは8月の研修からお伝えしていた通りです(右図)。もちろんどちらの発問で授業を進めようが、目指すところはその授業の「ねらい」ひいては子どもたちの道徳性を育成するものであることが重要だと考えています。

道徳科では、教科書の読み物教材を使って授業をすることがほとんどかと思えます。国語科の「読むこと」における単元も当然ながら読み物教材です。教科で目指す「ねらい(道徳)」と「目標(国語)」の区別をはっきりさせましょう。

場面発問	テーマ発問
<ul style="list-style-type: none"> 「この場面や場面の中の登場人物の行動や心情、行動の理由などを問う」 「この場面や場面の中の登場人物の行動や心情、行動の理由などを問う」 	<ul style="list-style-type: none"> 「この場面や場面の中の登場人物の行動や心情、行動の理由などを問う」 「この場面や場面の中の登場人物の行動や心情、行動の理由などを問う」

道徳科における発問
 ◇道徳性を育むために考えさせる発問
 ◇児童は、人間としての経験を根拠に考えをもつ

国語科における発問
 ◇論理的な言葉の力を育てるために考えさせる発問
 ◇児童は、文章中の言葉や文を根拠に考えをもつ

道徳科では「Fの△行目に書いてあるから、こう思った」ということではなく、「この行動のよさには、〇〇も心がある。だから、△△ということもあるだろう」というように、表現されていない物を見る必要がある。
 参考：新宮弘典「道徳授業ハンドブック4」

発問が違えば、それに対する子どもの反応も変わってきます。子どもから国語のような反応が出てくる場合は、発問の味や「書いてあること」でなくて、自分はどう思ったの?と問い返すことが大切になるかと思えます。

「場面発問」に偏りすぎると、目標があいまいな国語のような授業になってしまいます。道徳科では、「教材に書いていないことを発問する」という意識が一つのポイントになります。

私は、現在の3年生に4月の段階で「テーマ発問」で進んでも「?」という様子でした。低学年でいきなり抽象概念を聞かれて混乱するのも無理はないです。そのため、「場面発問⇒テーマ発問」というように、教材の世界を考えさせる場面発問の後に、テーマ発問を入れるなどして、子どもたちが考えやすい状況にするもの一つです。

(2) 道徳に関する校内研修の実施

校内研修においては、教員の実態調査の結果から分かった「発問」について扱った。一つの教材を読み合い、この教材から発問を考えるとすればどのような問い方をするかというワークショップ式の研修を行った。

また、本校は学級担任のうち初任者段階の教員が半数を占め、学習評価に関しての不安を抱く教員も多い。

研修の中では、道徳科の学習評価は「物事を多面的・多角的に考えること」「自己の生き方についての考えを深めること」などの学習状況を見取って評価を行うことや、通知表における記述内容に関しての話題とし、学習状況を見取ることができる授業を展開し、児童の気持ちや思いの変化がわかる記録(ワークシートやノート)の工夫が必要であること、常に自らの指導を振り返り、指導の改善に生かすことを確認した。

この他にも、自作教材を活用した授業実践の紹介等も行った。

4 道徳教育推進教師による授業

これまでに実施した取組において、「考え、議論する道徳科の授業」についての周知は図ることができたが、実際にどのような授業を行えばよいのか、イメージの共有が不足していた。

そこで、全ての学級において道徳教育推進教師による授業を実施した。学習指導要領解説においても、「全てを学級担任任せにするのではなく、特に効果的と考えられる場合には、道徳科における実際の指導において他の教師などの協力を得ることが考えられる。」と示されている。特に、物事を多面的・多角的に考えることができる発問や、自己の生き方についての考えを深める展開後段について、実際の授業からイメージの共有を図った。

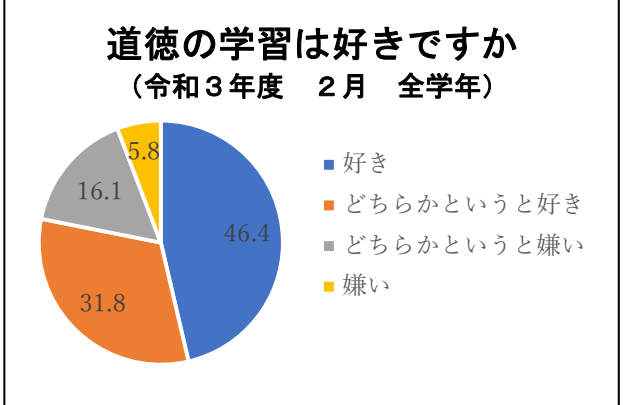
授業後には各学級担任に記述評価の一例(2・3名程度記入したもの)を配付し、評価の記述内容に関する理解も図った。



道徳教育推進教師による授業の様子

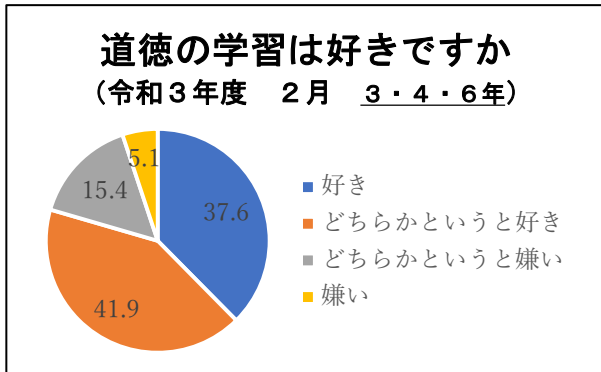
5 全校児童への「道徳アンケート」の実施

「道徳通信」「校内研修」での取組を通して、教員に対して道徳教育及び道徳科の授業に関しての共通理解を図り、授業改善に取り組んだ成果を把握するために、全校児童を対象とした



「道徳アンケート」を実施した。(アンケート調査を実施するに当たっては、その結果を評価材料としては使用しないことを事前に確認した。)

全校児童を対象としたアンケートの結果、「道徳の学習は好きですか」の設問に対し、肯定評価の割合が7割以上の結果となった。4月段階に実施した学年(第3・4・6学年)を追って結果を比較しても、肯定的な回答が25.6ポイントも上昇していることが分かった。



この設問に対する理由からも

- ・「色々な考えを言えて(聞けて)楽しい」
- ・「道徳で勉強したことと似ている場面に出くわした時、面白いなと感じる」

など、多面的・多角的に考えることや、自己の生き方について考えを深めることにつながる意見があった。

授業改善における取組を進めた結果、児童の道徳の授業に対する意識にも変化が見られたといえる。

6 創意工夫のある道徳教育の全体計画

以上の実態を基に、道徳教育推進教師が中心となって今年度の道徳教育の全体計画を作成した。

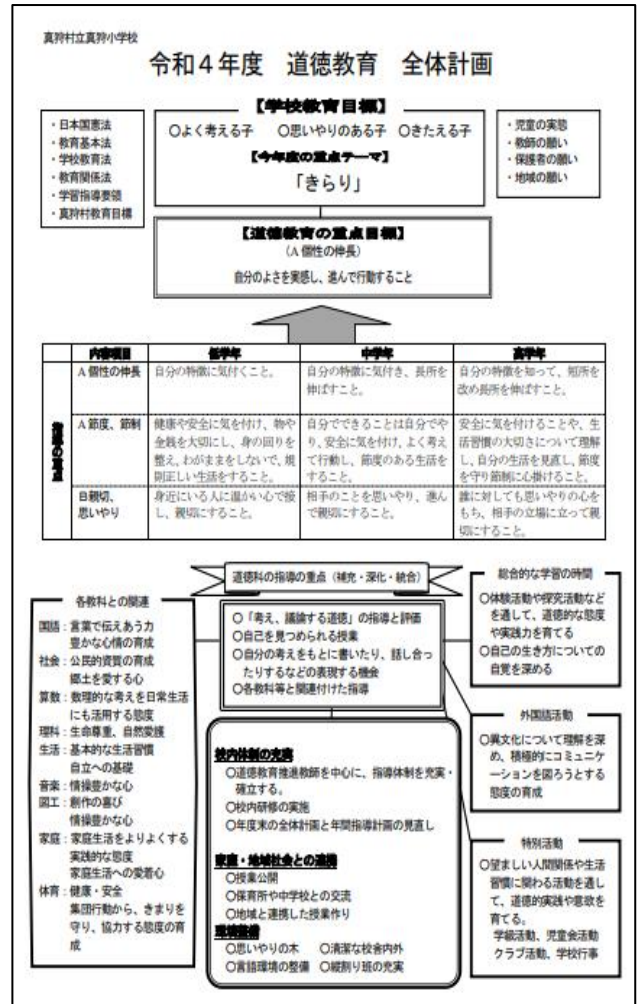
児童の実態としては、全校児童を対象に行った、「道徳アンケート」の結果より、「A 主として自分自身に関すること」の肯定的な評価が他の項目と比べ、低いことが明らかになった。

また、今年度の本校における重点テーマが「きらり」と設定されている。児童が、自己肯定感を高め、困難なことがあってもそれを乗り越え、よりよく生きていくために、一人一人の児童のよさを価値付けするというテーマである。そのため、学校における様々な活動において、「児童が輝ける場」を設定することを学校全

体で共通理解を図っている。

これらのことから、道徳教育において、今年度の重点となる内容項目は「A 個性の伸長」と設定した。

他の2つの内容項目に関しては、「他者のよさを認め合うこと」など、本校における重点教育目標を加味した上で設定した。



また、年間指導計画の作成においては、重点となる内容項目の「A 個性の伸長」及び他2つの内容項目の教材を複数となるように計画した。選択した教材は、普段使用している教科書に記載されている「補助教材」の活用や、「文部科学省 読み物資料集」から選択したものとした。

さらに、主題の配列においても、重点となる内容項目を意図的に複数回に設定していることから、児童の内容項目に対する考えの変容を見取るために、前後期にそれぞれ1回行うなどの、配列を替える工夫を行った。

ぼくらし さってな んだらう (自分ら しさをの ばして/ A 個性 の伸長)	○「自分らしさ」に気づいた児童 にして、自分の長所に気づき、 のばす意欲をもって生活するこ よになる。	←第3学年 年間指導計画 【文科省教材】 「シロクマのクウ」 (2年) 【教育出版補充教材】 「しかみ像にこめら
うれしく 思えた日 から 【文科省 教材】 (自分ら しさをの ばして/ A 個性 の伸長)	○自分のよさに気付き、自分の良 伸ばそうとする態度を育てる。	

7 道徳科の授業を通しての人材育成

今年度の取組として、初任段階3年次目の教員に向けての道徳科の授業改善に関するメンター研修を行った。

この研修では、道徳教育及び道徳科の授業における研修を深め、道徳科における授業改善を行うことをねらいとしている。

授業後の研究協議は、授業の改善に向けた十分な協議となり、参観者の先生にとっても充実した内容であった。



初任段階教員による授業の様子

授業者からは、

- ・道徳の指導案を書くこと、授業を公開することが初めてだったので、勉強になった。
- ・本質に迫る発問をした際、児童の思考が一時停止することが不安である。
- ・横書きの板書に初めて挑戦したが、矢印等を用いることで、思考が行き来する良さを感じた。

などの、授業後の振り返りがあった。

参観者の先生からは、

- ・すぐに答えを出すことが可能な発問では、スムーズに授業を進めることはできるが、児童の考えは深まらない。
- ・道徳は「答えを求める学習」ではないため、授業者の問い返しが児童の思考を深めていく上で大切になる。

といった意見があった。

授業者はコロナ禍における全国的な一斉休校の年に採用になった教員であるため、互いに授業を参観する機会や一同に会しての研究授業・協議はもちろん、授業を公開すること自体の経験が少ない。

今回、道徳科の授業を公開することにより、本校の道徳教育の充実に寄与したことはもちろん、学校全体で研修を推進し、人材育成を行うという組織力の向上にもつながったと言える。

8 おわりに

道徳教育の推進を行うに当たって、授業者である教員の道徳教育に対しての意識を把握した上で共通理解を図り、様々な取組を行ったことにより一定の成果を得ることができた。

結果、各学級における道徳科の授業改善が進み、学習者である児童の道徳の授業に対する考え方にも変化が見られた。

実態調査の結果及び、重点教育目標を踏まえた全体計画、年間指導計画の作成が進んだことも、全教員が同じベクトルで進めていく中では大きく前進したものだと思えている。

道徳教育推進教師による授業は、一単位時間で完結するという道徳科の授業の特質から、実施することが比較的容易であり今後も実施していきたい。

今後も授業改善を中心とした道徳教育の推進を図り、よりよい指導計画のための評価の在り方について研修を進めたり、参観日における道徳科の授業公開や、学級通信などを通して道徳の授業の様子を伝えたりするなど、家庭や地域との連携を図った取組を進めていきたい。